

第68回特別企画展

子規と進化する句会

— 俳句革新の原動力 —

令和4年

9月3日(土)～10月17日(月)

休館日：9月6日・13日・20日・27日、10月4日・11日（いずれも火曜日）

開館時間：午前9時～午後6時（展示室入場は午後5時30分まで）

会場：松山市立子規記念博物館 3階特別展示室

観覧料：個人400円 団体320円 65歳以上200円 高校生以下無料

《記念講演》

演題：「句会の子規—様々な創意」

講師：井上泰至氏

（防衛大学校教授・日本伝統俳句協会常務理事）

日時：10月16日(日) 午後2時～3時30分

会場：1階視聴覚室 ※入場無料

《ギャラリートーク》

9月11日(日)・10月9日(日)

ともに午前10時30分から50分程度

会場：3階特別展示室 ※聴講には観覧券が必要

《学芸員による関連講座》

演題：「句会稿からみる子規の句会」

日時：9月25日(日) 午前10時30分～12時

会場：1階視聴覚室 ※入場無料

※記念講演・ギャラリートーク・関連講座は、
新型コロナウイルス感染症の状況により、
中止もしくは入場制限等の変更を行う場合があります。

〒790-0857 松山市道後公園1-30

TEL 089-931-5566 <https://shiki-museum.com>

松山市立子規記念博物館

子規と進化する句会

「俳句革新の原動力」

句会とは、人びとが集まって俳句を作り、お互いの句を鑑賞し意見を交わす場です。今日も各地でさまざまなかたちの句会が催されています。これら現在の句会の根底には、子規が仲間たちと行っていた句会の作法が受け継がれています。子規は、お互いに句を選んで批評し合い、仲間とともに切磋琢磨しながら成長する場としての句会を提唱しました。今回の特別企画展では、子規の俳句革新の実践の場として重要な役割を果たした「句会」をテーマとして取り上げます。

明治二十（一八八七）年、二十歳の子規は松山に帰省中、三津浜の俳諧宗匠・大原其戎の手ほどきをうけ、本格的に句作に取り組みようになります。明治二十五年夏に帰省した際には、高浜虚子や河東碧梧桐らと集まり「競吟」や「十二ヶ月」といった形式の句作に挑戦しました。子規は、江戸時代からつづく俳諧宗匠が主導する句会とは異なる手法を模索します。その後、伊藤松宇らの俳句結社「椎の友社」から「互選」の方式を学び、宗匠の評価を下す旧来の形式から、仲間たちと批評しながら句を選ぶ新しい句会を実践しようとして試みます。

「俳諧大要」など子規の俳論が広まると、子規が提唱する新しい俳句のスタイルに共鳴した人びとが全国から集まり、子規庵の句会に参加しました。明治二十九年正月には、夏目漱石のほか、当時すでに文壇で影響力をもっていた森鷗外を交えた新年句会を開催しています。子規は、句会で小説家や歌人、画家など多彩な人びとと交流するなかで、句作

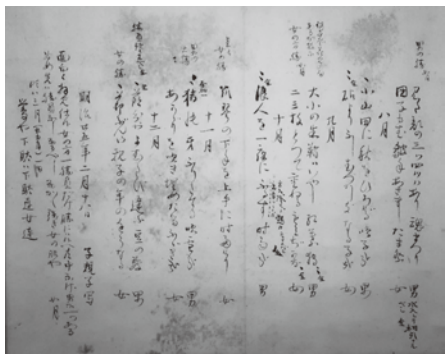
する力を磨き、自身の俳論をさらに深化させていきます。句会において子規は、若い俳人を指導する一方で、自身の句が批評されることもありました。こうした相互関係のなかで句会の質は向上し、子規の俳句革新の推進力となりました。

明治三十年代に入ると、子規や仲間たちの間で蕪村研究が盛んになり、日本派（子規派）の象徴的な句会の場として子規庵で「蕪村忌」句会が始まりました。また、蕪村に倣って一題で十句作り合う「十句集」の試みも実践されます。子規最晩年にはこの「十句集」を郵便で回覧して互選する新たな手法が編み出され、遠隔地の門人と句会をすることができるようになりました。

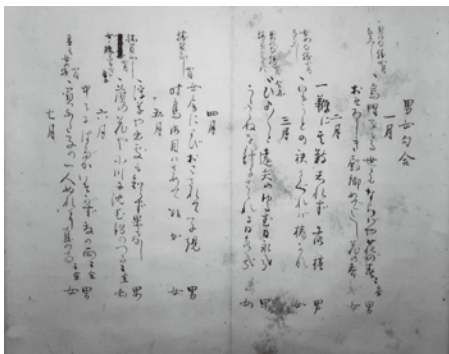
本特別企画展では、子規が「互選」の方式を取り入れながら仲間とともに作り上げた句会の実態に迫り、人と人がつながる「座」としての句会を見つめ直します。



下村為山画「子規庵句会写生図」
(愛媛県美術館寄託)

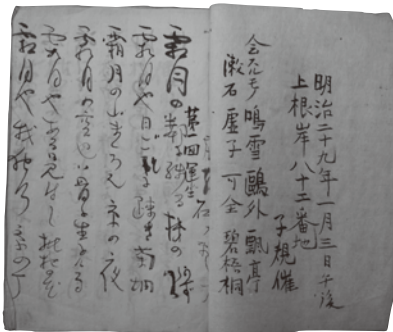


子規筆「男女句会十二ヶ月」

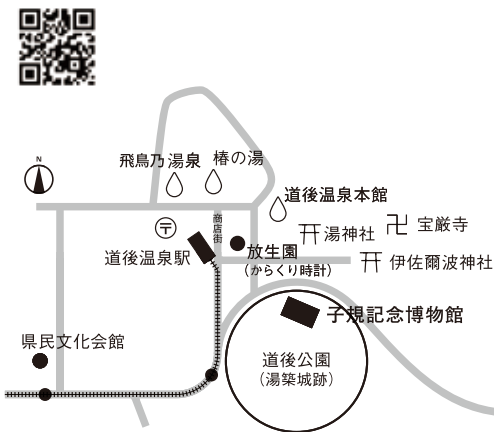


18	16	14	12	10	8	6	4	2	0
鳴鶴	子規	雪村	水	風	城	山	松	石	手
...

子規従軍送別句会得点表 明治28年2月17日
(虚子記念文学館所蔵)



句会稿「発句始」明治29年1月3日
(虚子記念文学館所蔵)



道後温泉駅より徒歩約5分/道後公園駅より徒歩約5分 ※公共の交通機関をなるべくご利用ください

松山市立子規記念博物館

〒790-0857 松山市道後公園 1-30 TEL 089-931-5566 <https://shiki-museum.com>



第一回蕪村忌記念写真 明治30年12月24日